

紀要の創刊に当って

館長 渡名喜 明

今年の2月1日で、那覇市立壺屋焼物博物館が開館満2年を迎えた。わたしが「博物館準備室長」として着任してからだと、もうすぐ満4年だ。着任当時、敷地では発掘作業が行われていて、出土した窯跡を掘り出し、館内に展示する予定になっていた。

展示予定の窯跡がもう1基あった。壺屋に先行する窯跡として歴史に残る「湧田窯」の窯跡が現県庁敷地から6基出土したが、そのうち1基を譲り受けていて、市港湾部の倉庫に保管していた。この窯跡は、屋上広場に設置される予定になっていた。

そして当時、展示予定の資料はこの2点のみであった。その年7月には館本体の着工が予定され、展示のストーリーづくりは展示業者との間で進んでおり、1年10ヶ月後には開館する予定だということに。なにしろ時間がない。しかも、その年度の資料収集費はゼロ、学芸員の配置なし、というないない尽くしの状態である。

もちろん、計画の立案から着工の運びにいたる段取りを整えてきた建築技査の城間悟、主任主事本永亨の苦労があって、ここまで来たのは事実である。しかし、いかんせん、博物館のソフトづくりという点では、どうしても<学芸員>(ひと)と<資料>(もの)が必要だ。以来、教育委員会および市役所の関係各課、議会などに要請を続け、なんとか予定どおり開館できた。

博物館が「調査研究紀要」を出すのは、「調査研究」を抜きにして、資料の収集も展示も、そして教育普及活動もできないという、わたしたちにとって自明の理由によるが、そのことは「博物館法」にも明記されている。開館3年目に入ってその創刊号を発行することになるが、開館特集号として、関係者から玉稿をいただき、掲載することにした。

わが館の開館にいたる経緯がモデルになるから、というわけではない。むしろ、逆だ。しかし、昨年マスコミで話題になった「新沖縄県平和祈念資料館」を初めとして、わが館と前後してオープンするか、その予定の博物館(資料館)の経緯をよそ目に見る限りにおいても、相変わらずわたしたちと同じ轍を踏んでいる様子が見え隠れする。関係者の参考になれば、との思いが走った結果である。「年報」も併せて発刊する。足りない部分は、年報をご参照いただきたい。

末尾になるが、玉稿をお寄せいただいた建築研究室・DAPの真喜志好一氏、乃村工藝社の上原裕氏、那覇市都市計画部の城間悟氏に謝意を表する。